

台風が過ぎたと思ったら突然、秋になってしまった感じです。台風は北海道の生活や農林水産業、鉄道や道路などに大きな被害をもたらしました。雪が降る前の早い復旧が望めます。最近の気象現象には想定外が多いように思います。気象庁では、「過去 30 年の気候に対して著しい偏りを示した天候」を異常気象と定義しています。過去 30 年ですから人が一生の間にまれにしか経験しない現象と言うことになります。また、平均気温や平均海水温などは過去 30 年間の観測値を平均して求めています。つまり 30 年間のデータがないと平均値が出せないことになります。

北海道の海面漁業及び浅海養殖業生産高を取りまとめた北海道水産現勢は、1958 年からデータの収集が開始されていますが、データが電子化され集計する魚種や漁業種類、地区などが現在と同じような区分となったのは 1985 年からであり、このほど確定値として 30 年分のデータが蓄積されました。そこでオホーツク総合振興局管内の 60 魚種（その他の魚類など単一魚種で集計していない魚種も含む）の漁獲量をグラフにして網走水試のホームページに掲載しました（<http://www.hro.or.jp/list/fisheries/research/abashiri/section/zoushoku/catch1985-2014.html>）。環境や漁業形態の変化などからこれら漁獲量の平均値を求めることにはあまり意味はないと思いますが、経年変化にはそれぞれにいろいろな意味が含まれていることと思います。例えば、漁獲量が右肩上がり増加している魚種（さけ、ほたて貝、かき）、反対に右肩下がりで減少を続けている魚種（きちじ、すながれい、えぞばふんうに）、はじめは漁獲量が増加傾向にあるが近年は減少に転じている魚種（ほっけ、ほっき貝）、何年かの周期で高い漁獲量を繰り返す魚種（たら）、周期性はなくある年に突然高い漁獲量を示す魚種（にしん、さんま、するめいか）、漁獲量も少なく変動が激しくて傾向がよく分からない魚種などがあります。毛がには以前から資源管理が強く行われており、そのため高い漁獲量が維持されているように思います。まつかわは近年人工種苗放流が行われ太平洋岸などで資源が復活しています。また、近年のぶりの漁獲量の急増は特徴的です。すべての魚種を合計した魚種計は 20 万～30 万トンくらいで、変動はあるものの緩やかに増加しているように見えます。これは管内で漁獲量の多い、さけやほたて貝などの漁獲増によるものと思われる。漁獲量の集計なので、なにかの都合で漁業が行われなくなった場合などは、資源量の変動を表していない場合もあるかと思えます。そのようなことも含め、見る人によっては変動の原因に思い当たることもあるかもしれません。興味のある方はグラフを眺めていただき、お気づきの点がありましたらお知らせいただければと思います。なお、水産研究本部の HP であるマリネット北海道のデータベース検索では、1991 年から最新年までの魚種別、月別、市町村別などの漁獲量をマウスの操作だけで集計できるようになっています。（網走水試 上田）